

〔レポートの実例と批評〕

孤独の皇妃エリザベート

コメント [1]: 内容をきちんと表現した良いタイトルです。

〇〇〇〇年度「初年次セミナー」 担当者 井上浩一

生活科学部 学籍番号〇〇〇 S. K.

コメント [2]: 科目名と担当教員名を書く。井上教授と書いた方が無難か？

コメント [3]: 学部、学籍番号、氏名は必ず。

はじめに	・・・・・・・・ 1 ページ
第1章 エリザベートの子供時代	・・・・・・・・ 1 ページ
第1節 憧れの父親マックス公	・・・・・・・・ 1 ページ
第2節 自然の中の自由な暮らし	・・・・・・・・ 2 ページ
第2章 ゾフィトエリザベートの確執	・・・・・・・・ 2 ページ
第1節 大公妃ゾフィ	・・・・・・・・ 2 ページ
第2節 皇帝フランツ	・・・・・・・・ 3 ページ
第3節 エリザベートとゾフィの違い	・・・・・・・・ 3 ページ
第4節 それぞれの孤独	・・・・・・・・ 4 ページ
第3章 エリザベートの逃避	・・・・・・・・ 5 ページ
第1節 逃避の手段	・・・・・・・・ 5 ページ
第2節 あてのない旅	・・・・・・・・ 6 ページ
おわりに	・・・・・・・・ 7 ページ
参考文献	・・・・・・・・ 7 ページ

コメント [4]: レポートの表紙に目次を付けておくとよい。枚数稼ぎなら、目次は表紙の次のページに入れる。

はじめに

このレポートではエリザベート(1837~1898)について取り上げる。ここで、エリザベートについて少し紹介する。エリザベートは、1837年バイエルン王国ヴィッテルスバッハ家に生まれ、エリザベート・アマリエ・オイゲーニアと名づけられた。子供時代は「シシィ」という愛称で呼ばれ、自由にのびのびとした生活を送り、1853年、オーストリア皇帝フランツ・ヨーゼフとシシィの姉ヘレーネとのお見合いに付いて行ったシシィは皇帝に見初められ、皇帝と結婚することになった。自由に育ったエリザベートは、厳しい規則の多い宮廷生活に耐えられず、宮廷から逃げるように、生涯旅を続ける。そして、1898年イタリア人無政府主義者ルイジ・ルケーニに旅先で暗殺された。

エリザベートという女性はその美しさと数奇な運命から、映画やミュージカルの題材となり、その物語はとて感動的である。彼女の生涯に強い関心を持ったので、エリザベートに影響を与え、また与えられたであろう人々と彼女の関係を通してエリザベートの個性を考察する。本論の進め方として、第一章ではエリザベートの子供時代について、父親マクシミリアンを中心に取り上げる。第二章では、結婚後の生活を姑と比較し、姑ゾフィ、夫フランツ、そして妻エリザベートのそれぞれの孤独を取り上げる。最後の第三章では、エリザベートだけに焦点を絞り、彼女の孤独への対応の仕方を述べ、最終的にエリザベートの個性をまとめる。

第1章 エリザベートの子供時代

1、憧れの父親マックス公

マクシミリアン・ヨーゼフ(1808~1888)はバイエルン王国ヴィッテルスバッハの傍系ビルケンフェルト・ゲンハウゼン家の家長であり、1828年ルードウィカ王女(1808~1892)と結婚した。彼は陽気で、宮廷生活よりも市民的な生活を好んでいた。また、分家の出であったため、その生活を実践することができた。もちろん宮廷の人々はそんな彼のことを良く思っていないであろうが、マックス公は個人主義者であり、他人になんと言われようとおかまいなしであった。それにマックス公は本質的には知的で真面目、感受性豊かで、偽善を嫌い、率直さを好み、持ち前の明るさから、街の人たちには愛される人物であった。

彼は大変な情熱家であり、特に馬が大好きで、自分の宮殿の中庭に円形の演技場や客席のスタンド備えた本格的なサーカス小屋を造らせ、自分の馬術を披露するのだった。また、狩猟や釣りなども楽しみ、森に出かけてはなかなか帰って来なかったし、馬で遠乗りをする時には、そのままどこかの村の宿屋に泊ることも稀ではなかった。なんと自由で独創的な生き方だろう。8人の子供の中で一番彼に似ているシシィが、彼の自由な生き方に憧れをもったことは違いないし、彼のそういった行動に影響も受けただろう。

コメント [5]: 「まず」あるいは「最初に」でしょう。

コメント [6]: 「はじめに」としては標準的なスタイル。(1) 取り上げる対象・テーマについての簡単な紹介、(2) なぜこのテーマを取り上げるのか、(3) レポートの構成をあらかじめ示す。いいですね。

コメント [7]: 仮想大学HP「下書きと推敲」のSさん下書きと比べてみて下さい。ずいぶん良くなっています。

コメント [8]: 下書きと比べよ。

コメント [9]: 下書きと比べよ。

コメント [10]: Sさんの感想がそのまま述べられて、論文らしくない表現ですが、この場合はむしろアクセントになっていますね。

シシィとマックス公の共通する部分の一つは、他人を傷つけても自分の生き方を貫こうとするところである。実際、マックス公は家になかなか帰らなかったし、子育てもほとんどしていない。一方、シシィも旅をして家族のもとにいることは少なかった。しかし、二人にも異なる部分がある。二人の大きな違いは死に臨む時の気持ちである。マックス公は死を向かえる直前、自分は幸せだったと感じたのに対して、シシィのほうは絶望とあきらめのなか死を待ち望んでいるかのようなようだった。つまり、自分の思うままに、自由を存分に楽しんだ憧れの父親と同じような行動をとったにもかかわらず、エリザベートはどこか何かに束縛され続けていた。では、エリザベートが生涯、どのような孤独を感じたのかを知るために、エリザベートの子どもの頃の生活をみていく。

コメント [11]: 次の節への展開もうまい。

2、自然の中の自由な暮らし

マクシミリアンとルードヴィカ、そして5人の娘、3人の息子たちは、冬にはミュンヘンで、夏にはバイエルン高原で過ごした。バイエルン高原のポッセンホーフエンの館は和やかで家庭的な雰囲気にあふれていた。また、開放性もこの家の特徴で、子どもたちは会いたいときに母親、父親に会うことができた。そして、ポッセンホーフエンまでは王宮の親戚の監視の目も届かないことをいいことに、父親は付近の農民たちと同じような生活を送り、シシィたちにも宮廷の規則に縛られることなく、村の子供たちと一緒に遊ばせていた。

特に、シシィの場合、自然が大好きであったため、彼女にとっての本当の教育は、感受性豊かな部分を大切に、彼女の身の周りの自然の息吹を感じさせることだと父親は考えた。シシィは勉強が嫌いではなかったが、外国語が苦手だったようだ。彼女は兄弟姉妹の中で、一番夢見がちで、優しく思いやりがあり、好きなことには誰よりも熱中するし、こだわりを持っていた。例えば、朝食は毎日8時まで母親と一緒にとるようにしていた。また、父親が帰ってくるのを狙って甘え、書齋で詩作に苦心している父親の邪魔をした。一方、マックス公も、家庭教師がシシィに勉強を教えるのを何度か邪魔してしまうことがあった。

シシィはこの自然に囲まれた自由気ままな暮らしを気に入っていたし、大人になってからも、子供時代が最も幸せな頃だったと感じていただろう。結婚後のシシィの生活は子供時代の生活と全くかけ離れていたのだ。

コメント [12]: 「いたのだ」という表現にはやや違和感がありますが、全体的に文章はしっかりしています。推敲をくりかえしたのですね。

第2章 ゾフィとエリザベートの確執

1、大公妃ゾフィ(1805~1872)

ゾフィ・フォン・バイエルン は 1805 年、ヴィッテルスバッハの本家に生まれる。バイエルン王女であったゾフィはシシィの母ルードヴィカの姉である。つまり、シシィの伯母であり、のちには姑となる。彼女はハプスブルク家のフランツ・カール(1802~1878)と結婚し、大公妃となった。ゾフィは

コメント [13]: 人物紹介は、辞典などをまとめたノートをそのまま利用したようですね。できれば、もう少し工夫して論文の流れの中に組み入れて欲しかった。

虚栄心の強い人物で、当時のオーストリア帝国の皇帝を占めていたのがハプスブルク家であったため、わが子を皇帝にするべきだと考えていた。そして、息子フランツ・ヨーゼフを皇帝に就かすことに成功し、若き皇帝の陰で国の政治を支配していた。

2、皇帝フランツ(1830~1916)

フランツ・ヨーゼフは 1830 年、ハプスブルク＝ロートリンゲン家に生まれる。その名前は、祖父フランツ 1 世と偉大な皇帝ヨーゼフ 2 世に因んでおり、立派な皇帝になるようにとの願いからつけられた。そして、1848 年、18 歳で 5 千万人のオーストリア人を背負う皇帝になった。フランツはとても真面目で冷静であったが、優柔不断な面があり、政治でも家庭でも悩まされることになる。18 歳からその生涯を終える 86 歳まで、皇帝の務めを果たした。

コメント [14]: コメント 13 と同じです。
論文・レポートは文章で表現する。箇条書きではない。

3、エリザベートとゾフィの違い

エリザベートもゾフィも、ヴィッテルスバッハ家からハプスブルク家に嫁いできたのだが、二人の結婚の経緯は大きく異なっている。

ゾフィの父親マクシミリアン 1 世は、国の安定を得るために、結婚政策を進めようとし、ハプスブルク家との婚姻関係を結ぶことが望ましいと考えた。ハプスブルク家に嫁ぐように命じられたのが、ゾフィである。娘時代、ゾフィは美人と誉れ高く、彼女も自意識が高かった。しかし、結婚相手のフランツ・カールは魅力的でなければ、とりわけ知的でもなく、この大公に妻を見つけることは難しいとだれもが考えた。ゾフィも当然結婚したくないと考え、抵抗してみたが、失敗に終わった。結婚してからも、ゾフィに夫への愛情は生まれなかったし、夫のほうも、特別ゾフィを好きなわけではなかった。二人は家のために政略結婚したのである。

これに対して、エリザベートの場合、フランツが一目ぼれしたことから、結婚が持ち上がったといえるだろう。フランツは婚約してすぐに、画家にエリザベートの肖像画を描かせるほど、エリザベートを愛していたのだ。エリザベートもだんだんフランツに心惹かれるようになり、結婚を承諾した。つまり、二人は当時としては、珍しい恋愛結婚であった。

しかし、ゾフィにしてみれば、この結婚は予定外であった。当時の結婚は外交関係に大きくかかわることであった。そして、オーストリア王家の特徴は、結婚政策で領土を拡大していったことで、「幸いなるオーストリアよ、汝は結婚せよ」というのが王家のモットーであった。つまり、結婚は個人と個人ではなく、家と家の結婚、国と国の結婚と認識されていた。そのため、ゾフィは適当な国、家柄を探していた。あれこれと模索した結果、自分の故郷バイエルン王国の、妹の嫁ぎ先であるヴィッテルスバッハ家なら外交関係からも、家柄からも問題ないと考え、ルードヴィカとともにフランツのお見合いを計画した。ゾフィは、シシィの姉、ヘレーネを結婚相手にしたいと考えていた。なぜなら、彼女がしとやかで、おとなしく、落ち着きがあり、皇后に向いていると思ったからである。計画していた結婚に誤算が生じてしまうことを恐れ、ゾフィは、シシィを嫁にしないために、あれこれと彼女

の短所をあげてみたが、フランツの気持ちは少しも変わらなかった。結婚する人は変わったが、結果的に家は変わってないことから、ゾフィはフランツの意志を尊重し、エリザベートとの結婚を認めた。

次に結婚後と比較すると、ゾフィは愛情のない結婚生活を悲しみながらも、決して人生を諦めることなく、行動に出た。子供を生きがいにしようと決めたのである。そして、息子フランツを教育し、18歳で彼が皇帝になった時から、ゾフィは次の新たな行動に出た。政治問題に何かと口を出し、ハプスブルク家の動向に大きな影響を与えた。つまり、彼女は優しすぎるフランツとは違い、旺盛な活力、実行力、鉄のように強い意志によって、どんどん目標を達成し、周りから宮廷最後の男とも言われるほどの力を持つ存在になっていった。

一方、エリザベートは想像もつかなかった結婚生活、つまり宮廷生活にショックを受けることになる。その生活とは、一日中大公妃がそばにいて、行動を監視されるというものだった。また、大公妃がそばにいない時は、皇后の身に周りの世話をする女官たちが、皇后が何を行ったかの一部始終を細かく大公妃に報告していた。毎日毎日、自分のことを見張り、宮廷のしきたりやウィーンの流儀から少しでも外れると、厳しく叱責する姑を、嫁は憎むようになっていった。エリザベートは夫フランツを頼ろうとするが、フランツは、政務に追われ、朝から晩まで仕事をしていて、エリザベートのそばにいなかった。結婚してそうそうエリザベートは寂しい思いをし、ウィーン宮廷で生活することも嫌になっていた。

宮廷では、エリザベートがすることは否定され、エリザベートの好む物はけなされた。たとえば、気分転換のために、愛馬に乗り、野原をかけると、宮廷の人たちのひんしゅくを買ってしまった。ゾフィは外国にいるフランツにそのことを報告し、エリザベートはそのような行為はよくないと彼に注意されてしまった。16歳の娘にはそこから逃れる方法はなかったのだろう。エリザベートは、フランツが自分の味方をしてくれないことが分かり、ますます宮廷で孤独を感じていた。

そして、ゾフィとエリザベートはハンガリーに対する考え方も違っていた。ゾフィは旧王朝的思想の持ち主で、王権神授を絶対的にとらえていた。これに疑問を持つような者はゾフィからすると反逆者同然であった。絶対君主性を立憲君主制に変えよう、オーストリアを立憲国家にしよう、という自由主義的な試みは全て危険な思想として嫌っていた。彼女は、自由主義は帝国の滅亡を招くものと確信していたのである。とにかく、今までどおりに、絶対主義を守りぬくことが大切と考えていた。よって、ゾフィは革命や反乱を嫌い、独立、自由を求めてオーストリアにたてつくハンガリーに対して好感を持っていなかった。反対に、世の中が民主主義になることを予想していたマックス公の影響から、エリザベートは、時代が自由主義にかわると考えていた。また、婚約期間にシシィがオーストリアの歴史を勉強した時の家庭教師が、ハンガリー出身であったことが大きく影響して、彼女はハンガリーにとっても興味を持ち、共感し、憧れを抱くようになっていた。

4. それぞれの孤独

ゾフィ自身の結婚は、前述したように、自らが望んだものではなく、彼女は夫のことを愛すること

コメント [115]: 前に出してもよかった。語順に注意。「反対にエリザベートは、世の中が……」と比べよ。

コメント [116]: 必要に応じてこのような文言を入れると、議論の組み立てが立体的になります。

が出来ず、子どもを生きがいにした。フランツが皇帝の地位に就いた時には、帝国とハプスブルクのことを誰よりも心配し、周囲に厳格であり続けたゾフィは、結果、嫁にも誤解され、孤立していた。つまり、ゾフィの孤独は、本来の彼女の人間味ある心を宮廷にも家族にも理解されなかったことである。

次に、フランツの孤独はフランツとエリザベートとのずれ違いにあると考えられる。二人のずれ違いは生き方の違いによるものである。フランツは時と場所を考えて振舞い方を変えていた。ウィーン宮廷では厳格になり、休暇で出かけている時には自由に振舞い、陽気になった。彼は、皇帝としての自分と、一人の人間としての自分を上手く使い分けることが出来ていた。つまり、オン・オフの切り替えを身につけていた。

一方、エリザベートは生き方を一つしか持っていなかった。そのため、ウィーンにいるときのフランツは厳しく冷たい、と彼女は誤解してしまった。エリザベートの生き方とは、自分らしくあることである。たとえ皇后という公的な立場にあっても、そのために自分を抑えることは考えられないのである。エリザベートは、何かにつけて性に合わないことを強いられるのでは、生きていくにはならないと考えていた。したがって、姑を代表とする宮廷人たちの監視のために、好きな事もできず、ありのままの自分でいられないことに、エリザベートは耐えられなかったのだろう。エリザベートは宮廷生活から逃れるために旅行に出掛けた。しかし、それが周囲に理解されず孤独となった。つまり、エリザベートの孤独は自らが選んだ道だった。

コメント [17]: 余り論文らしくない表現

コメント [18]: 「つまり」の繰り返し。文章のくせに注意しましょう。

第3章 エリザベートの逃避

1、逃避の手段

エリザベートは自分らしく生きるために自分を見つめ直し、発見したことは何だったのだろうか。ここでは、彼女の美貌と趣味に焦点を当てみよう。

幼い頃のエリザベートは特別美人ではなかったが、結婚式が執り行われた頃から、だんだんと美しくなった。エリザベートは、自分の美しさを自覚し、その美しさが自分の武器となり役立つと考えた。そこで彼女は美貌を維持することにかけたのである。エリザベートは自分の美しさを自覚すると、美しさを保つことにますます躍起になっていった。内気で人付き合いの嫌いなエリザベートにウィーンの上流階級で生きていくための自信を与えてくれるのは、自分が美しいという自覚にほかならなかった。

彼女が宿泊した城中には、平行棒、跳躍マット、そして鉄アレイなどが設置されていた。いわゆるトレーニングルームである。エリザベートは必ずこのトレーニングルームのような部屋を用意させ、そこで長時間の決まった体操メニューを行っていた。また、彼女は170cm以上の長身でありながら、体重が50kgを超えると太っていると考え、体重を50kg以下に保つことにも熱心であった。その

コメント [19]: 新しい章の導入。議論の運びがうまい。

ため、過度な食事制限をし、逆に体調を壊すことにもなった。太らないために何日もスープと牛乳だけしか口に入れないこともあった。何時間にも及ぶ激しいウォーキング運動のため、エリザベートに付き添う女官たちにとって、「散策」はまさに恐怖であった。歩くスピードが速すぎて呼吸困難に陥ることも珍しくなかった。また、エリザベートはウエスト 50 cm という細さを強調するためにウエストを締め上げていた。そして、女官がウエストを締め上げる手順を少しでも間違えると、彼女は激しく叱責したので、女官たちにとって、彼女の身支度をすることは精神的にかなりきつい仕事であった。

エリザベートの1日のエステティック・プログラムは次のようなものである。朝の5時か6時に起床して冷たい水風呂に入り、軽い食事をとる。次に、長時間かけて体操を行い、最後に髪の手入を3時間かけて行う。同時代人の目にはエリザベートの異常なまでの自分の容姿へのこだわりはほとんど滑稽に映り、このことで彼女の悪口を言う人も多かった。

老いによる美貌の衰えを防ごうとエリザベートは手を尽くすが、激しい運動をしたり、長時間外で過ごしたりすることが逆効果になり、彼女の肌は痛めつけられ、顔はしわだらけになってしまった。そのため、エリザベートは自分1人の世界にますます閉じこもり、外出する時には必ず扇か日傘を持ち、顔を覆い隠していた。美へのこだわりは宮廷や家庭内で果たさなければならない義務からの逃避であり、嫌でたまらなかった宮廷での日常生活からの逃避であった。

もともと体を動かすのが好きなエリザベートは、子供の頃から乗馬をしていた。しかし、大人になって、野原を駆け回るだけでは満足できなくなり、高度な技と危険が伴う競技乗馬を選んだ。彼女はある伯爵から有名な練習場を提供され、サラブレッドをもらった。この伯爵の指導のもと、高度な乗馬技術を習得しようという意欲に燃えていた。

また、エリザベートはサーカス小屋をたて、高度な馬術を披露した。これは、父親マックス公が自分の宮殿に演技場やサーカス小屋を造ったことが影響しているだろう。そして、近代馬術の母国であるイギリスへと向かい、そこで障害物競争の特訓を受けた。障害物を飛び越えるのに失敗すると、馬の脚が骨折し、エリザベートの命の危険に関わる事故になることもあった。フランスは危険であるからと注意を促すが、エリザベートは自分の情熱を抑えようとはしなかった。その結果、ヨーロッパの女流騎手を代表するような名手の一人となった。しかし、ウィーン市民は、自分たちが戦争の後遺症に未だに苦しんでいるのに、皇后がこのようなお金のかかる趣味に興じていることを容認できなかった。

2、エリザベートのあてのない旅

エリザベートは実際に精神的な重圧から、重いつつ病状態に陥って、医者のお勧めもあり、転地療養のために、最初はマディラ島を選び滞在していた。ここでは、全てから解放され、体調も戻るのだが、ウィーンに帰ると、再び病気がぶり返した。次にギリシャの**コアフ島**を選び療養生活を続けた。コアフ島では、前回のように体調が回復することがなく、エリザベートは拒食症となり、美貌も衰え、ますます気分は落ち込み、結局、家族の待つウィーンに帰ることにした。ここに、**エリザベートの個性**

コメント [120]: 呼吸困難になったのはエリザベートですか、女官ですか？曖昧な表現を避けるように。

コメント [121]: 間違い。コルフ島。

を感じられる。自由な生活を手に入れるが、その生活に飽きてしまう。そしてまた家族のもとで暮らす。そこに自由はなく、息がつまりそうになり、また旅に出ることだ。周囲からすれば、自由を叫ぶわがままな女性にしか映らなかっただろう。しかし、個性にしがみつくとこそ彼女の個性であったのではないだろうか。

コメント [122]: 「個性が感じられる」か「個性を感じる」ですね。細かいところまで注意しましょう。

おわりに

私は、ウィーン版ミュージカル「エリザベート」を観劇した時、エリザベートが歌う「私だけに」やゾフィが歌う「放浪の歳月」等を聞いて(ドイツ語であったため字幕ではあったが)とても共感を覚え感動した。けれど、このレポートを書くために、エリザベートについて書かれている本を読み進めると、エリザベートの個性はあまりにも強すぎるし、エリザベートが生きていた時代よりも自由に気ままに生活できる現代であっても、彼女の求める自由があるのだろうかと思った。エリザベートは常に死を待ち望んでいたが、自殺はしなかった。死を待ち望んでいたというのは、彼女が危険な馬術を続けたり、美貌を保つためとはいえ身体を酷使し、病気になったりと、全く自分の健康をいたわらなかったという点から感じられる。また、馬車が暴走しても何ともなかったとことを悔しがると言動をしていた。エリザベートが自ら死を選ばなかったのは、彼女の個性が自殺というものを拒否したからだと思う。ミュージカルでは、自殺をトートという黄泉の帝王にしたてていて、エリザベートの生涯を上手く表現していると思う。

コメント [123]: 感想を述べることで締めくくっている。それも「おわりに」の書き方のひとつであるが、感想文に近づいて、論文らしさがやや失われた感じがする。

参考文献

- ・江村洋著『ハプスブルク家の女たち』講談社 1993年
- ・カトリーヌ・クレマン著『皇妃エリザベート—ハプスブルクの美神』創元社 1997年
- ・マーティン・シェーファー著『エリザベート—栄光と悲劇—』刀水書房 2000年
- ・ジャン・デ・カール著『麗しの皇妃エリザベート』中央公論社 1990年

コメント [124]: 総評：よく書けています。構成も文章もしっかりしています。時代背景についてももう少し詳しく考察し、時代・社会のなかにエリザベートを浮かび上がらせるようにすればなお良かった。

コメント [125]: 訳書の場合は、訳者の名前も入れる。この本は三保 元訳です。